

## 下村湖人の政治教育思想

### —その形成期—

渡部 康 詞\*

#### 1. はじめに

教育という営みが卑近な権力として観念されることは、一般に公教育を受ける経験をもった私たちにとって、共通認識として捉えてよさそうである<sup>1)</sup>。しかし、教育制度というシステムの面ではともかく、教育者の心性という内在的な層においては「教育」と「権力」が結びつくことに対して違和感を生じさせるものであることも確かである<sup>2)</sup>。ではそのように教育者に不可避免的に訪れる葛藤は、どのような波紋を投げかけ、思想的に解消されてきたのだろうか。周知のように、大正デモクラシー期は自由教育が活発に論じられた時代であり、その葛藤が外在化しやすい時代状況であった<sup>3)</sup>。本論稿は、その時代に教師として活動した下村湖人を軸に時代を照射し、またその時代の中で葛藤を抱えた彼の思想形成を扱う。まず、教師としての彼の外見を回想をもとに提示しておこう。

「下村先生は大正九年に鹿島中学の校長として来任された。そのとき私は三年生であつたが、新任の挨拶をのべられたあの朝のことが忘れられない。先生はやおら壇上にのぼるや、仁王立ちになつて、全校の職員生徒を睥睨しつつ、運動場いつぱい響きわたる声で大獅子吼をされた。それは実に激しい気魄のこもつたもので、この劈頭一番の落雷に、われわれは度胆を抜かれてしまつた。あのとき先生は頭を坊主刈りにしておられた。多分勤務召集を受けて帰られた直後でもあつたらうか。あの坊主頭の青い色が、今でもあざやかに目に浮かんでくる。(中略)はじめ暫くの間は、人々の出方を見

守つておられる様子で、きつい顔をしておられたが、やがてもう大丈夫と見られたか、だんだんとあの特徴のある笑顔を見せられるようになった。そして生徒に向つて何でも自由に希望意見を申し出るようにといひ渡された。これは厳格そのものであつた前波高長の時代には、考えられもしないことであつた<sup>4)</sup>。」

下村湖人(1884～1955年、明治17～昭和30年)は『次郎物語』の作者として著名であるが、教養文学の作者としての一般的なイメージからは、このように「大獅子吼」をする下村は見えてこないだろう。前半部に活写される下村は、まさに「権力」と結合されやすい教育者像といふことができよう。だが、後半部まで読めば教育者としての下村が顔を出していることがうかがえる。彼は何を考えながら「壇上」にたつたのだろうか。

さて、教育者・下村湖人をさらに政治教育という領域において捉えることは、従来ほとんど行われていなかった。政治教育はまさに教育と権力が思想的に近接する領域である。唯一といつてよい先行研究<sup>5)</sup>でも、あくまで政治教育運動の推進者である田沢義鋪の追従者としての役割しか与えられていない。

だが、上にあげた回想からも分かるように、下村は教育者として実際に教壇に立ち、生徒たちとの関係性の中で過ごした経験を持つ人物である。その下村の思想を、官僚であつた田沢の思想と比較すれば差異が生じるのは想像に難くない。

では、彼の思想の特質とは何か。ここで本稿の見取り図として「政治教育」概念の枠組みに

\*埼玉県立狭山緑陽高等学校

についての認識を蠟山政道に従って示したうえで下村の立場を素描したい。

政治も教育も、人間が生れ、社会生活を営む上で必要とした社会活動であるという点では、親和性を持つものであるが、両概念を結合するに当たっては注意が払われねばならない。例えば、行政学者である蠟山政道は『教育学辞典』の「政治教育」の項目で次のように述べている。

「もともと政治と教育とはその目的と手段とに於て夫々異なる概念である。政治とは社会関係の統制を目的とする権力的行動に関する諸現象である。故に政治では国家が権力を以て個人に臨むことが究極的な傾向である。これに反して教育は教へらゝる者と教ふる者との間に於ける人格的の交渉によつて生ずる個人の意思・知識の陶冶現象である。従つて教育に権力が用ひられることがあつても、それは本質的傾向ではない。<sup>6)</sup>」

この蠟山の指摘は、政治教育を論じるうえで重要な意義を持つてくる。そもそも、政治概念が伝統的に有する、関係性の中での権力の存在は、教育という営み—下村によれば「すべての教育事実は、自己教育にはじまって自己教育に終る」—の中では拒否されるのである<sup>7)</sup>。

「政治と教育が結合され、政治教育という概念が成立することについて、蠟山は二つの理由をあげて説明する。第一は、「教育一般に通ずる理由」であり、「過去の生活体験や歴史的伝統や現在包蔵する所の人間の経験」を将来に伝えると共に、「欠陥は更に完成」に向かわせるため、とされる。第二は、「政治に特有な理由」であり、「一定の政治的権力やその体制」は国民の理解を最大限に得ることで、目的の達成を容易にするので、「教化又は教育の手段」に、すなわち政治教育によって政治を円滑化させようとするため、とされる。これらは、換言すれば、前者は教育を目的とし、教育活動から内在的に結合された政治教育であり、後者は、

教育を手段とし、政治権力から外材的に結合された政治教育であるということができらるだろう。ここでは、便宜的に前者を政治内在的政治教育と、後者を教育内在的政治教育と呼ぶこととする。」

両者はもちろん単純に両極化することはできないが、結論を先取りしていうと下村湖人については、教育内在的政治教育に強く傾斜した意識を持つ教育者であった。

では、教育内在的政治教育の思想的基盤とは何か、それを明らかにするのが本稿の課題である。これから、下村湖人の政治教育思想を、その形成期に焦点をあげて考察する。外面にあらわれた「大獅子吼」、この内面における思索の過程を追いかけていく。

## 2. 教師以前

湖人下村虎六郎は、佐賀県神埼郡千歳村（現神埼市千代田町）大字崎村の、田舎では格式の高い、士族内田家の次男として、1884（明治17）年10月3日に生まれた。同地は広大な佐賀平野の一端に座を占め、西北に背振山系を、東に筑後川を持つ、水田が回り一面に広がっており、いわゆる田園風景を作り出している。「肥前と筑後との国境を有明海へむかって流れる筑後川の下流から、わずかに遡った」地であり、「かつては米、酒、蠟などの産物によって栄えた」というが、おそらくは河川交通が衰えて以降、交通の便が悪くなり、「さびれ果てた一寒村」にすぎなくなっているという<sup>8)</sup>。同地が舞台となっている『次郎物語』第一部においては、「蠟搾め」の場面が描かれているし、下村の少年時代においてははまだ産業は行われていたとされ、描写からも「寒村」の雰囲気は感じ取れない<sup>9)</sup>。

さて、このように故郷の描写にこだわるのは、本稿で扱う下村湖人の思想形成期において、特に彼の一大転換期ともいえる教育者への道を開くことになったのは、その家庭と故郷の斜陽化という、環境的要因によって説明されることが常であるからである<sup>10)</sup>。確かに、「近在での家柄」と

言われた内田家は、虎六郎の父・郁二の世話好きな性格が災いし、彼が政治運動に手を染め資財を投じたことなどもあり、じりじりと家運を傾かせていたし、1899（明治32）年には家財を売り払い佐賀市に、後に千歳村に残っていた不動産を売り払い熊本市内に酒店を開くなど転々としている背景には故郷・千歳村自体の斜陽化が窺えるだろう。虎六郎自身もこのような家庭環境と無縁ではいられなかった。1903（明治36）年に第五高等学校第一部（文科）に入った時には熊本で酒屋をはじめた父親は破産しており、学資の見込みも立たなかったという。そこで、父親の知り合いであった関係で学資を援助してくれたのが、佐賀で有数の資産家であり、納税額から貴族院議員にも叙せられた下村辰右衛門であった。この時点で、中学時代から中央の『帝国文学』などに詩歌を投稿し名をはせていた虎六郎を、「将来は必ず下村家の養子に」という内約があったという<sup>11)</sup>。ただし、「遊蕩三昧」の日を送っていたという辰右衛門の家も没落の兆しをみせることになる。下村が教師になることを決めたのは、東京帝国大学を卒業した1909（明治42）年以降と考えられるが、この時にはすでに養家の下村家もすでに没落していた。

「ゆう星の匂いはゆかしく、夜半の星の匂いは嵩高に、暁星の匂いははかなし。夕ぐれ西に、あさあけひんがしに、情ある光を放つ明星は、いくたびか多くの詩人をなやましたりけん。げに罪ふかきものよとある人はささやぎぬ。さあれ罪は詩人にぞあらん。星はただ清き匂いけだかき匂いサブライムの匂いを示すのみ。いかでか弱き情とつつまん。いかでかはかなき嘆きを示さん。われは常に星華燦爛たる宵晨を眺めては、ひたすらに自然の神の莊嚴なるをたたえ、とこしえに錆びざる天の鑿の大なるに驚き、自らこの身の小さきを笑うのみ<sup>12)</sup>。」

これは五高時代に作った彼の詩の一節である。「詩人」は自然の莊嚴さの中で「身の小さき」を思う。「とこしえに錆びざる天の鑿」は彼の予感

した運命だろうか。彼は自己というものよりも自然を描き、その美しさの中に埋没する自己を寂しげに眺めていた。少なくとも彼の詩情は、自己を押し出すというよりは、深く掘り下げる方向へ向かっていたようだ。どこか哀調を帯びたこのような詩情は、彼の貧困し没落した家庭や境遇と無関係とは思えないのである。

このようにみえてくると、下村にとって貧困や家庭の困難は、心身の、特に内面的成長に少なからざる影響を及ぼしたであろうことが推測できる。そこで、彼の教育者への歩みは果たして環境的要因からのみ説明してよいのだろうか、という疑問が生じてくる。確かに、直接的動機としては格好の理由ではあるのだが、本節では下村の詩人・文筆家として活動していた時期（1901（明治34）年～1909（明治42）年）からすでに、彼が教育者としての思想の萌芽を持っていたのではないか、ということを中心に論をすすめていくことになる。

まず、下村にとって詩とはどのような意義を持つものであり、道徳とどのような関係をもたせたかを五高時代に『竜南会雑誌』に寄稿した「詩的勢力と道徳的勢力」という論説からみていく。ここで下村は、「単に詩的勢力と云い、道徳的勢力と云う。予が所謂勢力とは感化影響の義なり。人心に於ける感化と社会に於ける影響とを意味するなり」とした上で、「詩」と「道徳」を対比的に論じていく<sup>13)</sup>。

「大詩人ひとたび其の椽大の筆を呵して立つや、一代の人心は争うて其の勢力範囲内に走らむ」とし、下村はゲーテとバイロンを例に挙げる。「平治整齊」の世にあってはゲーテの如き詩人が生まれ「社会」は「益々平和の域に達する」という。「恍惚として人を酔わしむ」その詩が、「貴族」には美を追求させ、「政治家」には平和を主張させ、「細民」に至っては「財を以て購う」ことのできない「慰藉や歡樂」を与えるからである<sup>14)</sup>。

一方、「紛擾悖乱」の世にあっては、バイロンの如き詩人が生じ、「人心は益々破壊的」に向かうという。「優柔の貴公子」を「恐懼」させ、「無

能の政治家」を「驚惧」させるその詩は、「塗炭の細民」には「鬱勃たる反抗の心」を發させ、「平和の星」の下への「革命」へ向けさせる。この「廓清や革命」は詩に求めなければ起こりえないとされるのである<sup>15)</sup>。

これら二人に代表されるように、詩という文芸的活動によって社会に「平和」や「革命」を与えること、それが下村にとっての「詩的勢力」であった。

次に下村が挙げる「道徳的勢力」の代表者は孔子である。孔子は「戦国の世」において、当代の国主に向かい「極力道徳の鼓吹」をなす。「曰く、上之を行うて下之にならうと。又曰く、民安んじて国富強なりと」、しかし道徳は、「其の教が社会の上下を通じ表裏を徹するに至るまで、年処に費す所」決して少なくないとされる<sup>16)</sup>。

「急ならず激ならず、一人これを伝えて一人化し、更に他に致して他之に倣う。引いて一家を導き、一村、一国、社会全般に説き及ぼさざるべからざるなり。而してそのここに至るべき経程の遠き、負荷の重き決して庸常の任にあらざるなり。畢竟根底の鞏固をなすは道徳家の事なり。方法の健全は道徳的感化の事なり。結果の嚴然たるはこれを道徳的勢力の作為に求めざるべからず。着実なる社会、それを形造るには、實に道徳を以てするに非れば能わず<sup>17)</sup>。」

このように、「道徳的感化」は一人を対象にし、一人から家へ、家から村へと少しずつ感化してゆく作用であるため、どうしても「詩」と比べると地道である。「詩は一時に社会全般の人心を奪い、道徳は漸次に上級より下級に其の勢力を張る」と述べられるように、「感情的」な詩に対して「理性的」とされる道徳には、「事理を解する」という段階が不可欠であるため、また「経程の遠き」様を呈してしまうのである<sup>18)</sup>。しかし、「根底の鞏固」をなすのは道徳家とされているように、「詩の人心支配は大にして短なり。道徳の人心支配は小にして長なり」とされ、詩の感化は「一時」「瞬間」にのみであり、一方で

道徳の影響は「永遠」にまで及びうる<sup>19)</sup>。よって、「軽薄なる社会をして、着実なる社会となさんと欲せば、其の力を道徳に仮らざるべからず」とされ、道徳的感化の必要性が強調されるのである<sup>20)</sup>。

とはいえ、下村は詩の必要性について、大きく二点を挙げ説き及ぶことになる。それは、「社会の一大革新、一大革命を行わんと欲せば、吾人はこれを詩に求めざるべからず」というように「緩慢」に陥りがちな道徳的感化への刺激剤としての役割と、もう一つは「詩は自然感化を与え、道徳は人事感化を与う」というように、自然を人に紹介し、「人心の根本」に向かって感化を与えるという役割である。両者とも道徳に足りないものを補う形で尊重されている点に注意したい。下村にとって「詩と道徳との調和」、いわば自然感情を尊重しながら社会化することこそが理想の感化作用であった<sup>21)</sup>。

ここで確認しておきたいことは二点ある。第一は、下村が詩や道徳を社会への影響力を軸に評価していたことであり、特に政治的作用を中心に社会への影響をはかっていた点である。詩や道徳は政治への感化を通じて社会に影響しているように、下村にとって政治は「道徳的勢力の作為」の対象であった。特に道徳についてみれば、それは「一人」を起点とし、徐々に社会全体へ影響させてゆくものである。詩と対比することで、下村は道徳を「作為」として、能動的作用の中に捉えることができていたのである。下村にとって詩や道徳は社会に対して行う積極的感化として意味を持つことができていたということができよう。

第二は、下村が詩と道徳の「調和」を説くところから窺えるように、当時の文壇に対しても道徳家に対しても不満を持ち、一定の距離を置いていたことである。「詩人、文士が、ただ文学的見地」のみより「写実を標榜」し、「恋愛を歌う」は可であるが、「人類の發達を願ひ、社会の完璧を希うの士あらば、願くば少しく其作物に道義的觀念を加味せよ。道徳的理想を寓せよ」と述べているのは、当時の文壇への不満の表明

と言える<sup>22)</sup>。帝国大学時代に、自然主義文学者である岩野泡鳴を相手取り論争を行なっているのは、この意識の延長ということができよう<sup>23)</sup>。一方で道徳家に対しては「道徳の根本的見地」より「厳乎莊重の態度」にでることは可であるが、「其教化を速かならしめ、其勢力を強盛」にさせるためには「文学的趣味」を与え、「詩的情熱」を加えよと指摘する<sup>24)</sup>。

さらに、下村は後に「生命と勝利」という論説を書き、自身の道徳に対する意見を表明しているので詳しく見てみよう。まず、「そも宗教とは何ぞ、道徳とは何ぞ、而して人格とは何ぞ」と問いを發し、「これ語にあらず、字にあらず、音にあらず、而して理想にあらず、主義にあらず。偉大なる人格の發現即ちそのものなり」としている<sup>25)</sup>。下村にとって「宗教」、「道徳」、といったものは抽象的な概念ではなく、具体的な「人格」と共にある。そして、人は「生命」により支えられているという。「人心を支配するものは主義にあらず。勝利を得るものは理想にあらず。胸中何等のたのむべき生命なくして、何を徒に理想と云うや。主義と云うや。愚なり、笑止なり」とまで述べ、道徳や理想よりもまず「生命」というものを軽視してはいけないことを忠告する<sup>26)</sup>。

「夫れ、吾人が宇宙大生命の一部をうけて、生を乾坤の間に得たる以上は、すでに吾人の根底生命の微動あり。吾人は、ただこれを助長し、振作せしむれば足るなり。ここに吾人は修養の必要を見る。然り、然れども見よ、今日の所謂修養は、美しき若芽をくじいて、直ちに凋落枯稿の冬木たらしめんとするものならずや。絶美の情想を付けて、こちたき理性の人たらしめんとするものならずや。明白に之を曰えば、青年ならざるべからざる、否事実にあらずして青年なる吾人をして、直に白髪無氣力の老翁たらしめんとするものならずや。愚かなるものよ、情想なき修養家よ。これ豈に吾人の生命をして活動あるの生命たらしむるものならん

や。(中略) 道徳令万能主義にかぶれたるものよ。みだりに情想に専制を加うるものよ。一切生命の活動を迫害し、侮辱するものよ。汝等は汝等自らを縛して自由意志を妨げつつあるを知らずや<sup>27)</sup>。」

下村はこのように生命を軽視した、「道徳令万能主義」の「修養」を批判する。彼にとって「修養」は「生命の微動」を「助長」し、「振作」すればよいものであったので、「青年」への過剰な「修養」はその生命を委縮させるものとして批判されたのである。ここには単純な「修養家」とは一線を画する下村の思想の萌芽が窺い知れるだろう。「吾人は主張を有す。吾人は吾人なり。吾人は他人にあらず。故に吾人は他人を学ぶべからず。他人を学んで己れを没却すべからず。吾人は吾人自らを發展すべし」と述べるように、下村は、他人よりも先んじて自己の価値を尊重することを求めているのである<sup>28)</sup>。一方では、自然主義文学に対し、道徳を求め、また一方では生命に対し道徳の一律的適応を拒否する。このようにして下村は「詩」と「道徳」を「調和」させようという中庸の立場を取るようになっていたのである。

さて、ここで下村の思想形成期における教育への眼差しを総合してみよう。彼は、文芸活動を通じて、文芸についての思索を深める中で教育という営みを見つけていった。彼にとって文芸の欲求は、「美的欲求」ではなく「全心の欲求」であり、「理想」を排しないものであったため、「人生」というものを「理想」に基づいて深く考えさせた<sup>29)</sup>。このことは、人間形成というものを考えさせる契機となっていた。自己の生命を尊重し、生命に立脚した理想を一義的に考え、それを阻害するような修養を人間形成の過程において否定し、「人格」を通じた具体的な「道徳」の「作為」に可能性を見出したのである。換言するならば、生命の尊重という現実的要求に基づいた理想を希求しようとする志向である。ここに、教育という営みへの眼差しを見たい。生命の尊重のみを求めたのが自然主義文学者、理想的な

道徳のみを求めたのが道徳家としたならば、「現実には理想によって生き理想は現実によって血が通う」ことを標榜した下村は、両者を止揚する立場をとったのである<sup>30)</sup>。

下村は文芸のみを目的とし、そこで活躍し、名を馳せることを目的にはしていなかった。常に、自身の理想を、現実に即して追求することを考えていた。

「あゝ余が詩は、余の胸より発せずして余の筆より発せしものなるか。この問題は余に自信さえあらば憂ふるにも及ぶまじ、されど、尚ほ一步を進めて余の詩は余の人格の発現ならざるか、即、人格なくして筆端詩を弄するものなるか、其の筆端の弄巧を省かば残るところの人は、人ならざる人なるか。足下余の嘆声は即ちこゝにある也<sup>31)</sup>。」

これは友人である高田保馬に1906（明治38）年7月に書き送った書簡の一部である。ここに、彼が文芸において筆先の技巧よりも、「人格」の発現というものに比重を置いていた内情が窺えるだろう。「筆端の弄巧」を省いたときに残される「人」、その「人」のあり方こそが彼にとって思索の根本であったのである。

ここまできて、教育者への道というものは、下村にとって、経済的理由で浮かび上がる消極的選択肢であったのみとは思えない。彼にとって、教育という営みに従事する事は、内面的要求とも合致する部分があったのである。

### 3. 下村湖人の「教育」

下村湖人は教育者として以下のような経歴を歩むことになる。

- 1911(明治44)年 佐賀中学校, 英語教師
- 1918(大正7)年 唐津中学校, 教頭
- 1920(大正9)年 鹿島中学校, 校長
- 1923(大正12)年 唐津中学校, 校長
- 1925(大正14)年 台中第一中学, 校長
- 1929(昭和4)年 台北高等学校, 校長
- 1931(昭和6)年 台北高等学校長退任<sup>32)</sup>

この間、下村は27～47歳であり、約20年間、

いわば人生の働き盛りの時期を教職、特に学校教育に費やしたことになる。社会の歴史と連関させるならば、ちょうど大正期という、いわゆる「大正デモクラシー」の時代に相当し、彼が学校教育の公務から離れるのは戦争の足跡の近づく1931年である。

さて、下村は教育という仕事に携わる中でどのような感慨をえただろうか、1916（大正5）年9月、高田保馬宛の書簡の中に興味深い感想を見ることができる。

「学校に於ける生活は極めて平凡です、たゞ教師と云ふものの大多数に対する烈しい憎悪の念が時々むらへと湧いて来る位が求め得られる変化でせう。私は個人を悪む事は非常に多いのですが、不思議にも団体としての人間を憎む事が少ないのです（尤も可成しばへ私は暴君の如く教室で振舞ことがあります）それで居て、教師と云う団体には殆んど愛情を有しません、教師の多数が生徒の団体に愛情を有せざるが如くに。」

ここで下村は、教師という「団体」の中において自分が違和を感じていることを吐露している。この時下村は教師になって5年目とまだ若く、文芸活動への思いも断ち切れないうたらしいことは、同書簡に「仕事最中に折々思想の問題にかへらんとする頭がうらめしいです、それにも拘らずそれが又一種の慰めです」と、「平凡」な学校での生活を送る中で「思想」の問題を扱いかねている自身の生活を「奇怪な生活」と否定的ニュアンスを込めて述懐していることに見ることができる<sup>34)</sup>。もちろん、この書簡は文芸活動を通じて友情をはぐくんだ高田との関係性の中で捉えるべきものであり、下村が創作への未練を書かざるを得なかったという蓋然性を捨て去ることはできないだろうが、一方で、少なからざる自負と、未練を事実上感じていたことは確からしい。

しかし、この事は前節で確認した下村の教育者への内面的な志向性と決して矛盾するものではない。それは、文芸活動においても根本的に

「感化」を基準とする志向性であった。ここで下村が感じなければならなかった不満は「感化」の方法を巡るものであり、目的自体から不満を感じていたわけではないのである。「教師と云う団体には殆ど愛情を有しません、教師の多数が生徒の団体に愛情を有せざるが如くに」という一文には、生徒への「愛情」を欠如させた教育を方法とする教師という団体への批判的見解とともに、教育の目的たる生徒へは「愛情」を基礎に接するべきであることが、暗に教育の理想として掲げられているのである。自身が教師という職に有りながら、教師への「憎悪」を自明視できていたのは、文芸活動で培った自負と理想による視座を、教師たちの間に埋没することなく抱き続けたからであろう。「感化」の方法において文芸活動を基点になされた逡巡は、「教育」という方法を、「教育」の理想から見ることを容易にし、かえって広範な「教育」像を下村に与えることになったのである。

さて、上に見たような構図で教育への不満を蓄積する下村は、少しずつ意見を開陳し、不満を表出させていくことになる。

「不徹底—これが現代社会のあらゆる方面に適用される痛ましい評語である。人体に動脈硬化と云う病症があるが、不徹底と云う社会的病症は恰もこの動脈硬化に相当する。現下に何等の痛苦も発熱も惹起することなきが故に社会は毫もこの病症を意識しない。不徹底と云う社会症があり得べきか否かさえ知らずに暮して居る場合がある。そして青年の志操がどうの、良妻賢母がどうの、立憲思想の普及がどうの、科学工芸の発達がどうのと騒いで居る。更に下落しては党閥がどうの、学閥がどうの、そしてお仕舞には教員を優遇するとか仕ないとか云う悲哀な問題まで論じて社会の衰亡を防ごうとして居る。不徹底と云う病気に手をつけないで百の弊害をため、千の改良を行った所で、要するに不徹底な形式の完備にすぎない。社会は結局文物制度基盤の目の如く整

頓したまま冷たい死骸となって横わるの運命を免れない。<sup>35)</sup>」

これは、『佐賀県教育』に1916(大正5)年頃下村が著した「教育界の人生盲」という論説の冒頭である。彼にとっては教育の論議が、「不徹底」を改善する前になされている様が、どうしても空疎に思えたのである。「青年の志操」「立憲思想の普及」「良妻賢母」など、広義にとれば政治教育の議論とも見えなくはないが、下村はそのような議論に明け暮れることよりも、大切なことを説こうとする。

まず、不徹底とは何か、下村にとってそれは教育者の「怠慢でない」範囲における「形式的勤務」の蔓延であった<sup>36)</sup>。たとえとして、以下のような事態を挙げている<sup>37)</sup>。

「茲に一人の生徒があつて何か校則を犯したかの嫌疑があるとする。取調べる。調べても中々事実を云わない。手を代え品を代えて居るうちにとうとう事実を白状する。そこで保証人に警告を与えるなり処罰をするなりそれ相当の処置をとる。勿論処置の如何に関らず本人に対しては何等かの訓戒を加える。それは修身書なり何なりで百も承知の説法である。これで先ず役目は済んだ事になる。そしてそこには教育家としての深い道義の観念もなければ、義務の観念もない。」

この時、「教育家」は「怠慢でない」範囲において「形式的勤務」をしていることになる。ここで批判される形式とは「外形」的なものであり他者による「批難」を意識して作り上げられたもので<sup>38)</sup>、「教育家」はこの時単純に役割を形式的に遂行するだけの存在に成り下がっている。下村が批判するのはその形式主義である。

この場合、「怠慢」だけが問題になるのではない。例えば、教育家は形式的に道徳を捉え、「かくある可し、かくあるべからず」という一種の因習的道徳観念に捉われて、何等子弟の心情を解剖する事なく漫然己の善しと信じ、義務と心得て

居る所を頑強に実行して行く所の人々」は、「実行力の旺盛」な点は「感歎」に値するが、「其の靈性に流動の力」がないため、その努力は「日に日に更新して行く青年の心」に対しては「全くの無効果」とする<sup>39)</sup>。すなわち、「因習的道德観念」を生徒に対して適応してゆくこと、それは所与の徳目をもって現実に存在し「日に日に更新」してゆく生徒を断ずることであり、生徒の「心情」というものをはじめから度外視した処理であるため「実行力」は生徒の前で空回りすることになるということである。

さらに、下村はこのような問題は再生産されることになるという。「形式的の勤務、不徹底な真面目が、訓練の結果其の向上すべき道に向上する事なく、一転して却て固陋な因習道德に捉えられるのを見る時、教育界に如何に巨大な病魔がひそんで居るかが想像されよう」と下村は指摘している<sup>40)</sup>。「若き教育家」においても「訓練」が「固陋な因習道德」に向かつてなされるということは、教育界全体の先行きに対して不安をもたらすものである。教員養成が演繹的に、画一的になされることによって起こる弊害という事が出来よう。「画一ハ兒童ノ能力否定教師ノ教育力杜絶」と、下村は手記に書いているように、画一⇐「固陋な因習道德」が中央において改善する事無く、教師において再生産されていることを批判しているのである<sup>41)</sup>。

このような教育界の現状に対し、下村は教育家へ「哲人的態度」を求めることになる。まず、下村は「人生」とは「生命とか、靈性とか、第一義的道義とか云う様な哲理的方面から見た究極の人生」としたうえで、以下のように述べる<sup>42)</sup>。

「そこで「教育界の人生盲」と云う題目は教育界が究極まで人生を見ようとする力を欠いで居ると云う意味になる。一体教育界ばかりでなく如何なる方面に於ても究極まで人生を見ようとする力の欠けた所に徹底した事業の行われよう筈がない。けれども人間の改造にたずさわる教育に於て特にこの感を深うする。しかも今日の如く教育界

に人生を見よう生命に触れようとする努力、言い換えれば一種の哲人的態度の欠けた時代はなかろう。」

「哲人的態度」とは、教育家が被教育者の「人生」に即し、その「人生」の究極まで見ようとする態度とすることができる。このような態度は、形式的に「事務的」に教育を行う態度と相反するものであるという。教育とはそもそも被教育者が存在して成り立つ営みである。その人生をより良くしよう、よく見ていこうという態度が根本であったはずである。しかし、「教育家が哲人的態度を失って一種の事務家」に変じてしまったという状況を呈してしまっているのは、「遠からずして全く官吏の手先となり、帳簿と報告との整理に日もこれ足らざるの状態が現出されるであろう」と、下村は予測し、警告を発する<sup>43)</sup>。理想の教育とかけ離れた現実に、彼は嘆息を漏らさざるをえなかったのである。

「改めて云う、哲人的態度より得たる人生の味達、人生の味達より得たる人生の肯定、人生の肯定から生じた人生の熱愛、人生の熱愛から生じた人間の改造、これが即ち真の意味に於ける教育である。その可能不可能を云為する時、そこに教育家の勇気の欠如と、不徹底とが暴露される。兎に角我々は進まなくてはならぬ。進んで我々の最善を尽さねばならぬ<sup>44)</sup>。」

「哲人的態度」において教育に臨むこと、これは確かに理想的であるが多くの教育家が「哲人的態度」をとることは、現実性には乏しいものである。しかし、そのことを論じていてもはじまらない、「我々」は理想に向けて少しずつ進まなければならない、これが下村の結論であった。教師の団体の中で下村が感じた違和、これは決して自身と教育の違和ではない。自身の理想と、現実の大多数の教師によってなされる教育の乖離の中に生じた違和であった。そして、違和の中で、下村は自身の理想とする教育を結晶化してゆくことになる。それは、教師以前、文芸活動を

通じ培われた、詩人としての彼の思想—「生命」の尊重と因習的道德への反発—を強く反映したものである。そして、その思想を彼だけのものにせず、生徒たち、被教育者全体に投げ与えたこと、そこに彼の教育者としての面目を見たい。

教育者としての下村について、例えば、以下のような回想もある<sup>45)</sup>。

「大なり小なり脱線する生徒のある事は、今も昔も変りはない。そんな場合、先生は一応説諭を加えられ「二三日自宅によく反省してみよ」と諭された。脇道にそれかけた者、血気に逸つた者が、立ち直り救われた例は多かつた。」

下村は、生徒自身が「反省」し考えることを重視していた、それは実践においても変わらなかったようである。下村は理想と現実との乖離に絶望せず、教育の中に生徒を見失わなかった。「兎に角我々は進まなければならぬ」という言葉には、教育者としての自己認識と、「人生の熱愛から生じた人間の改造」という教育の理想へ向けて少しずつ進むことへの深い決意が窺えるのである。

#### 4. 政治教育の周縁

さて、ここまで下村の教育観を中心に論を進めてきたが、ここで本稿の主要な論点である政治教育との関り、または位置関係を見ておきたい。

下村のパートナーである田沢義鋪が政治教育運動を具体的に開始した時期として、1924（大正13）年1月の新政社創立に求めることができるが、その内面的な契機として1923（大正12）年9月1日の関東大震災があったと、下村は田沢の伝記に書いている<sup>46)</sup>。また、同時に田沢だけでなく下村にとっても、この1923～24年は政治教育への関心を強く見せた時期であった。

まず、関東大震災への眼差しを、彼の手記から抜き出してみよう<sup>47)</sup>。

「震災に際して同胞相殺したあの狂暴は、教作的のもの、今にして考ふれば断腸の思

あらん、有機的社会の紐帯は教作によりてもろくも破る。同胞相殺したるは個人的には相当の理由もあらん、社会的に大きく見て寸毫の理なし。個人本能は理智心制せらる、社会本能は法律教化に支配される、いずれも一教作で本能暴露」

ここで言われる「同胞相殺したあの狂暴」については、関東大震災時に起こった、自警団による朝鮮人虐殺、亀戸事件・甘粕事件などの政治的虐殺事件が想起できるが、史料の性質上詳しくは分からず、また当時佐賀県唐津中学校校長であった下村がどれほどの情報をどこから得ていたかは定かではない。ただし、これらの事件を情報として捉え、「日本ノ社会的欠陥」と総評していたことは確かである<sup>48)</sup>。下村にとって、この事件が顕在化させた「社会的欠陥」は「有機的社会の紐帯」が「教作」によって「破」れてしまったことであり、「教作」自体ではない。

ここで注目しておきたいことは二点ある。第一は、下村の中に「社会」と「個人」を対置させ、「社会」に多くの役割を与える思考が現れている点である。「同胞相殺」事態に対し、従来「個人」を尊重する立場をとっていた下村は、「個人」内行的に行動を批判する視座を持つことができず、その役割を「社会的」に「寸毫の理なし」として「社会」に与えているのである。第二は、「個人」においては「理智心」を、「社会」においては「法律教化」を、「本能」を「制」し、「支配」するものと個別に論じながら、そのような「制」・「支配」も「一教作」でもろくも崩れさってしまうことを指摘している点である。

下村は、これらの点を総合し、個人内部の「社会精神ノ貧弱」を批判し、「教育と災害とは永遠に争ふ、理想は教育の勝利」とし、「教育」に解決を求めてゆくことになる<sup>49)</sup>。下村にとって震災後の復興は「物質復興と共に精神復興」が「大切」であった。具体的には「復興は形式と共に内容を要す、政府の力により制度が定めたるものは形式、人民の力により内容をもる事大なり」であり特に、政府主導でなされる「形式」

的な制度による復興だけではなく、そこに「人民の力」を盛り込むことが肝要と説いている。ここに、政治に対する意欲・意識を持つことの重要性を、下村が感じ取っていたことが窺えるのである<sup>50)</sup>。

それは、1923（大正12）年11月10日に政府側の「精神復興」への対応策に相当する「国民精神復興ニ関スル詔書」を受けて下村が『佐賀県教育』に発表した「国民精神の振作に関する意見」において見ることができる<sup>51)</sup>。

「政治は正義の履行であって、国民の誰もが考えて置かねばならぬ問題であるにも拘らず、政治の墮落は真面目な国民をして政治に興味を失わしめた。宗教家や教育家などは、政治を論議する事によって、自己の職業の神聖をけがすとさえ思っている。国家の政治はいつでもよいと云う事は、国家の正義はいつでもよいと云う事である。何と云う恐ろしい錯誤だろう。かくて国民の指導者たる宗教家と教育家とは、日々国家の正義と没交渉になり、同類観念が薄弱にし、同事思想の破壊につとめて居る。政治は国民の参与すべき最大の共同事業だ。真面目な国民が政治から遁避するほど国家にとって恐るべき事はない。」

ここに、国民が政治に「興味」を持ち、「参与」することが重要であるとする下村の思想が述べられている。特に、「国民の指導者」である「宗教家と教育家」が政治に対し消極的であり、政治と国民を媒介せずにいることが「国家の正義」をないがしろにしていることにつながるとして厳しく批判している。「政治教育」という語を用いてはいないが、多分に政治教育の意義を感じ、接近していることが窺えるのである。

特に、下村が「同類観念」という概念を政治と教育をつなぐ上での基礎として重視していることに注目しておきたい。この「同類観念」は、同時代の文化を批判する中で導かれた概念である。同時代の文化とは、下村によれば、「自我」の成長が「類型を脱し」「伝来の当為を蔑視」す

ることで過剰となり、あまりに「利己的」「独りよがり」「高踏的」に「ただ内観へ内観へと突き進む」ものであり「時代錯誤」と片づける<sup>52)</sup>。そして、「日本人」という「類性」を「地盤」としながら「這い直す」ことで「自我」を再発見し、「類性」の上に打ち立てることを「研究」によってなすべきとしている<sup>53)</sup>。これは、第一節で確認した「生命」と「道徳」を共に尊重し、止揚する立場をとろうとした思想を、教育者として「自我」と「類性」の相克する場において具体化したものということができよう。ここでは「自我」と「類性」は互いに対立するものではなく相補的なものとして捉えられているのである。このように、「自我」が「類性」の中に埋没すること無く、両立させることができるのは、下村にとって「自我」が「生命」に基礎を置き、常に流動する過程として捉えられていたからと考えられる。「現在の刻々こそは、「我」の生命の刻々だ」「我」は物の中に眠ってはならぬ」と述べ、「我」の輪を描く過程のなかに「生命」の「表現」を求めているように、「我」「自我」というものは生命の中で流動し、固定されえないものであった<sup>54)</sup>。そしてそのため、教育という過程が重要視されているのである。

では、このような文化の領域で形成される概念である「同類観念」がなぜ政治とかわるのか。それは、「真の同情は、私の考えでは、同事にまで進まなくては駄目」という、認識に基づいていた<sup>55)</sup>。「情を同じくするだけなら、涙で止り、詩で止り、一時的な寄附金で止ってもよからう。しかし事を共にするには、涙を乗り越え、詩を乗り越えて、現実の世界に営々として血と肉と頭とを共に働かせなくてはならぬ。それがためには、我々はしかと類性に目を覚まし、強烈なる同類観念の喚起を緊要とする」とあるように、文化の領域に関する「同情」は一時的には効果を挙げるが、「同事」という政治の領域に持続的に影響を及ぼすには、「同類観念」が必要であったのである<sup>56)</sup>。すなわち、「自我」という内面的事象を拡散するに任せるだけでなく「類性」に引き付けながら「研究」の過程に置き、「同類観

念」を媒介させることで「自我」同士の共同を可能ならしめ、「同事」⇨政治へ向かわせようとするのである。

このような「自我」同士、言い換えるならば「主観」同士が共同してゆくために必要となる道徳的基礎は何か。ここで、下村の「他者の主観への思慕」という言葉に注目してみたい<sup>57)</sup>。

「客観的事実の共通認識が、人間を結びつけているのか。無論、それも一部の結紐であるに相違ない。しかし、それは決して全部ではない。第一、人間はそれだけで満足するものではない。然らば、何が彼等を結ぶか。それは他者の主観への思慕である。主観の完全な一致はのぞめないとしても、一致を求める心は、たしかに万人にある。他人の主観への思慕、それが所謂進んだ意味での愛である。」

ここでは、客観的事実の共通認識、例えば法や規則が人を結びつけることは確かに認められるとした上で、それぞれの主観を尊重しながら、主観同士が「他者の主観への思慕」という感情を抱くことで「結紐」=社会的紐帯を作り出すことに下村は重要な意義を認めている。「思慕は思慕それ自身として尊い。しかも、思慕は、主観相互の完全なる一致を生むことは出来ないが、それを培うことは出来る」とあるように、「他者の主観への思慕」は両者の独自性を維持させつつも、互いに交錯し相関的に作用し合うことで成長し合うことのできるものである。

「宇宙は、一面において、独自なるものの対立である。他面において、それら相互の間の思慕である。この事実は動かすべくもない。そして、生の妙趣は、この一見相矛盾する二大法則の統一にある。宗教も、文芸も、政治も、経済も、この二大法則のいずれをも、踏みはずしてはならない。そして、それらの堅確なる足どりを準備するものが、すなわち教育である。浅い心では出来ない仕事なのである<sup>58)</sup>。」

そして「独自なるものの対立」だけでなく「他者の主観への思慕」を含めた「二大法則」を如何に統一するのか、下村は「政治」もこの領域に引き直す。そしてその基礎を固める役割を「教育」が担うとするのである。下村にとって政治は道徳的に考えられるべきものであり、教育の延長線上に位置づけられていたといえることができる。

では、このような教育は実践においてどのように構想されたか、手記を手掛かりに可能な限り確認しておこう。まず、教師の「権威像」というものを問題にする。これは、「理智心」や「法律教化」による支配化において形成された社会の紐帯が「教作」において簡単に崩れたことから考えられたものであろう。下村は、教師の権威を「神」としての「権威」と「友」としての「権威」とに分離し、前者は「早晚破レル」と否定したうえで、後者を「共に共ム」ものとして重視する<sup>59)</sup>。これは、縦の関係性によって培われる紐帯の脆さを自覚したうえで横の関係性で紐帯を作ることを目指す教育であるといえよう。また、教師の権威を教師自身が自覚的に操作するだけではなく、積極的な「横ノ訓練」として「少年団」というものを挙げている<sup>60)</sup>。「学校ト同一ノ少年団不可」とされているところから逆に、学校に通う子供たちを対象に考えられたものであることが分かる。これは、後に社会教育者として青年団教育に従事した下村湖人が、学校教育に携わっていた時分から、極めて似通った教育方法を執ろうとしていたことを示す史料として極めて興味深い。下村にとって青年団や少年団といった社会教育の領域は、境遇として消極的理由で扱うものではなく、教育の目的から積極的に取り入れられた教育方法であったといえるのである。「横ノ訓練」を、横の関係性の構築力=社会力を重視する立場から実践すべきとする発想は、下村の政治教育思想の基調といえるだろう。

また、「同類観念」を「横ノ訓練」において結びつけることだけでなく、実際の政治に対し、批判的見解を教師が持つことも下村は求めていた。

「社会各般の出来事に就て、生徒が具体的な質問を發する時、勇敢にこれに答える者が今日の教育界に果して何人あるか。進んで自ら具体的に説明し批判し、しかもそれを教育家の権利であり、義務であると自覚して居る者に至っては、寥々として暁天の星の如くではあるまいか。我等はあまり屈従しすぎて居る。そして正義に盲目になりつつある。生徒に愚弄せられるのは当然すぎるほど当然だ。制度が悪いと云うのか。それもあろう。しかし、制度は叫ばざる間は永久に改革されない。ある地方では、教育家が思想問題を研究する事を禁ぜられた。そして其の地方の教育家は黙々としてこれに忍従した。驚くべき墮落だ。無論私は無批判な反抗をそそり立てようとするのではない。しかし教育が国家生活と個人生活の全部を取扱うものである限り、我々は我々の任務を完全に果たすために、社会各般の問題に対して、もう少し情熱を有して然るべきだ<sup>61)</sup>。」

ここにおいて、教育は政治に屈従すべきでないという下村の姿勢が強く打ち出されている。「教育が国家生活と個人生活の全部を取扱うものである」とする認識において、教育はその営為において政治を完全に内包していることになる。そして、教育の論理において、「社会各般の問題」に対し意識を高く持つようにと指摘するのである。前節で確認したような下村の、被教育者の人生に即して理想化すべきという教育観を敷衍すれば、いずれ国家と関らざるを得ない被教育者に即して政治を捉えることにつながるものであり、下村湖人の政治教育は、教育が政治を内包する中で考案されることになるのである。

以上見てきたように、下村にとって政治教育は教育の必要に応じ、教育に内在的に立ち現れたものであった。またその表れ方も、「他者の主観への思慕」に基づく「同類観念」の養成といった、内面的・道徳的なものであり、一般の政治教育とは一線を画するものであったようである。

このように、「政治教育」という語を用いずに独自の政治教育を論じた下村は、詩人時代から培われた強靱な自己意識の下、政治教育の周縁に位置することができていた、ということができるのではないか。田沢義鋪と親密な交友関係を続け、自身政治教育に関心を持ちながらも、政治教育運動—選挙肅正運動に積極的に加担しなかった彼は、「政治教育」という語に対し一定の距離感を保っていたということが出来る。付くこともせず、また離れることもしない、まさに流動する「生命」のような彼の思想と立場を周縁性として位置づけておきたいのである。

## 5. おわりに

以上、本稿では作家として捉えられることの多い下村の教育者としての容貌を描くとともに、彼の思想を政治教育の周縁として位置付け、その教育内在的政治教育思想の基盤を明らかにした。

文芸活動に励みながらも、その目的に道徳と詩情の調和した「感化」を置く下村は、内面的に教育者への志向性を萌芽的に持っていた。その「文芸活動」期に培われた思想の性質は、教育者となっても維持され、教育内部で教育を批判的に捉える視点を確保させていた。彼の批判は政治に対し屈從的な教育者に向けられ、政治教育への接近を窺わせるが、それはあくまでも被教育者の人生を思っただけで導出された、教育に内在的な政治教育であった。

作家を目指した強烈な自意識と教員生活を続ける中での葛藤・思索の日々、それが教師・下村湖人に「他者の主観への思慕」を中核とした思想形成を可能とさせていた。

これは、教育の客体として抽象的に捉えられがちな生徒に対しても一人一人が「主観」を持つことを期待した言葉である。権力とはかけはなれたあり方ということが出来るだろう。政治教育とは、ただ単に一斉授業形式で生徒たちに政治や経済を解説する行為だけに限定されるべきではない。もしそうだとしたら、下村が「政治教育」という言葉を極力使わなかった理由もおのずから明らかとなる。

一人一人の人生と政治、この多様かつ壮大な結びつきという重責を政治教育が担うのであれば、これからの政治教育は法文にあるような事

務的な冷たさだけでなく、幅広くそして人間の顔の見える温かさとともに考えられるべき課題として捉えられるべきではないだろうか。

## 註

- 1) 例えば、宮台真治『権力の子期理論』(勁草書房, 1989年)で展開される議論を参照。
- 2) 小玉重夫「戦後教育における教師の権力性批判の系譜」(森田尚人他編『教育と政治/戦後教育を読み直す』勁草書房, 2003年)を参照。
- 3) 中野光『大正デモクラシーと教育』(新評論, 1977年) 栄沢幸二『大正デモクラシー期の教員の思想』(研文出版, 1990年)などを参照。
- 4) 松枝茂夫「虎六郎先生」(永杉喜輔編『一教育家の面影—下村湖人追想—』新風土会, 1956年) 84～85頁。
- 5) 武田清子「田沢義鋪における国民主義とリベラリズム—青年団運動の形成をめぐって」(『日本リベラリズムの稜線』所収, 岩波書店, 1987年)
- 6) 蠟山政道「政治教育」(城戸幡太郎編『教育学辞典』第2巻, 岩波書店, 1937年) 1383頁。
- 7) 『塾風教育と協同生活訓練』1940年5月(『下村湖人全集』6巻) 10頁。
- 8) 明石晴代『『次郎物語』に賭けた父・下村湖人』(読売新聞社, 1970年)
- 9) 『次郎物語第一部』1941年2月(『下村湖人全集』第1巻) 79頁。
- 10) 例えば、深川明子は「大学卒業後、やりたかった文学活動を家庭の事情で断念し、不本意ながら郷里に留ることになった」として、教育者への道を彼にとって「不本意」なものであったとしている(深川明子「下村湖人の思想形成(二)」『金沢大学教育学部紀要』, 人文科学・社会科学・教育科学編 20巻, 1971年, 177頁)。ただし、深川においても「凡夫」という下村の作品から「自分が「凡夫」で「社会の人」であると言う自覚を起点として、後年青年団教育, 壮年

- 団教育などの庶民教育に挺身することになり、郷土愛を説き、隣保共同社会建設の必要性を説くのである。この「凡夫」における自覚は今までの彼の観念的な思考から脱却する起点でもあったのだ。(たゞそれを彼自身が明瞭に意識するにはまだ余りにも若かったが)」と述べられるように、思想形成期から教育者としての「自覚」が存在したことを読み取られている(深川明子「下村湖人の思想形成: 内田夕闇時代の作品から」『金沢大学語学・文学研究』1巻, 1970年, 58頁)。深川がこのように教育者への道を「自覚」させながらも「若さ」を理由にして「文学活動」を断念したことを「不本意」とさせるのは、詩人時代の下村を高く評価するためだと考えられる。
- 11) 前掲『『次郎物語』に賭けた父・下村湖人』, 14頁。
  - 12) 「におい」1903年4月(『下村湖人全集』10巻) 14～15頁。
  - 13) 「詩的勢力と道徳的勢力」1903年10月(『下村湖人全集』10巻) 23頁。
  - 14) 同上, 23～24頁。
  - 15) 同上, 24頁。
  - 16) 同上。
  - 17) 同上, 24～25頁。
  - 18) 同上, 25頁。
  - 19) 同上, 26頁。
  - 20) 同上, 27頁。
  - 21) 同上, 27～28頁。
  - 22) 同上, 28頁。
  - 23) 永杉喜輔『下村湖人伝』(柏樹社, 1970年) 94～95頁。
  - 24) 前掲「詩的勢力と道徳的勢力」, 29頁。
  - 25) 「生命と勝利」1904年2月(『下村湖人全集』10巻) 31頁。
  - 26) 同上, 33頁。

- 27) 同上, 34～36頁。
- 28) 同上, 35頁。
- 29) 「全自然文学論」1909年9月(『下村湖人全集』10巻)125頁。
- 30) 同上, 127頁。
- 31) 「高田保馬宛書簡」1905年7月5日(『下村湖人全集』10巻)264頁。
- 32) 永杉喜輔『下村湖人伝』(柏樹社, 1970年)303～304頁
- 33) 「高田保馬宛書簡」1916年9月13日(『下村湖人全集』10巻)288～289頁。
- 34) 同上, 288頁。
- 35) 「教育界の人生盲」1916年5月(『下村湖人全集』10巻)144～145頁。
- 36) 同上, 146頁。
- 37) 同上。
- 38) 同上。
- 39) 同上, 147頁。
- 40) 同上。
- 41) 「下村湖人手記」(下村湖人生家蔵)。
- 42) 「教育界の人生盲」(『下村湖人全集』10巻)147～148頁。
- 43) 同上, 148頁。
- 44) 同上, 149～150頁
- 45) 副島丈太郎「異色の校長」(前掲『一教育家の面影—下村湖人追想—』)93頁。
- 46) 『この人を見よ』1954年11月(『下村湖人全集』9巻)343頁。
- 47) 「下村湖人手記」(下村湖人生家蔵)。
- 48) 同上。
- 49) 同上。
- 50) 同上。
- 51) 「国民精神の振作に関する意見」1924年(『下村湖人全集』10巻)157頁。
- 52) 同上, 156頁。
- 53) 同上。
- 54) 「自己表現と奉仕」1923年11月(『下村湖人全集』5巻)23～24頁。
- 55) 「国民精神の振作に関する意見」(『下村湖人全集』10巻)156頁。
- 56) 註52)に同じ。
- 57) 「教育的反省」1930年8月(『下村湖人全集』5巻)43頁。
- 58) 同上, 44頁。
- 59) 「下村湖人手記」(下村湖人生家蔵)。
- 60) 註47)に同じ。
- 61) 「国民精神の振作に関する意見」(『下村湖人全集』10巻)158頁。